

〔研究報告〕

## 万葉集にみる「防人」に関する考察

高 継芬

### 【要 旨】

上代、東国出身の防人やその家族が詠んだ歌が防人歌である。父母・妻子・恋人との別離の悲しみや望郷・旅情などが素朴に歌われていて、読む人の心を打つ歌が多い。《万葉集》中に収められた防人および防人の家族たちの歌〈東歌（あずまうた）〉とともに、古代東国の民衆の歌として貴重な作品群である。

中国にも『詩経』や『唐詩選』の中に万葉集の防人歌と似ている歌がある。小雅の「采薇」は詩経の中でも最も美しい詩とされているが、「出車」、「杕杜」と並んで従来の解釈では、これは 獫狁という遊牧民の侵入によって、西周が衰亡したことを嘆いた歌とされてきた。まさしく防人の歌である。

中国・唐代の玄宗皇帝の治世（8世紀）は盛唐と呼ばれて国力も充実し、その支配は東北辺境の幽州（まだ中華の中心ではなかった現在の北京一帯）から西北のタクラマカン砂漠周辺にまで及んでいた。「辺塞詩」とはこれら都から遠く離れた「辺塞」での異民族との戦いを舞台にした「防人歌」のことで、家族や友人との別れ、過酷な自然、望郷、出征の悲しみなどが歌われている。

国が違っても、同じ人間であり、その気持ちを日本の「防人歌」のような歌に託したかった心情は同じなのではないだろうか。このような観点から今後、日本の「防人歌」と紀元前に中国を治めた古代王朝「周」の時代の「詩経」及び漢詩や文選との比較研究を行いたいと考えている。その研究を行うためにも「防人」という語の由来について考察する必要がある、本稿は「防人」という語、中国の防人、日本の防人について論じる。

キーワード:中国の防人、日本の防人、軍防令、万葉集、

### I. はじめに

いかなる国家にとっても国防が大切である、ということは改めて言うまでもない。

日本に於いて国防が特に強調されるようになったのは、江戸時代の末、林子平<sup>1</sup>や高島秋帆<sup>2</sup>が唱へ始めたからであるが、日本人の祖先は約千二百年前の奈良時代には兵役につき、遠く九州の果てまでも国防のために出かけていたのである。

徴兵制度は、奈良時代の持統天皇の御代から既に現代と同じように行われていた。その後、規則が変わったが、つい最近まで入営する兵隊は近衛師団や方々の師団に分かれて入隊していたように、その時代も二十歳以上で兵隊に選ばれた者は、ある一つの軍団（師団のようなもの）へ入るのが常であった。全国の軍団の兵隊が一年交代で京都へ上り宮中

を護っていたが、この兵隊のことを衛士という。また軍団の兵隊は、京へ上るほかに三年交代で九州の筑紫へ赴き、その海岸を護ることになっていた。この兵隊のことを防人という。九州は朝鮮半島に一番近いので、警備を厳重にしなければならない。それ故、特に防人というものを置いて海岸を護らせたのであった。

防人として行く兵隊は、奈良時代頃から東国（今の静岡県以東）の兵隊に限られるようになった。東北地方の人達は特に忠誠で、勇ましかったからである。

また、上代、東国出身の防人やその家族が詠んだ歌が防人歌である。父母・妻子・恋人との別離の悲しみや望郷・旅情などが素朴に歌われていて、読む人の心を打つ歌が多い。《万葉集》中に収められた防人および防人の家族たちの歌は〈東歌（あずま

た) 〉とともに、古代東国の民衆の歌として貴重な作品群となっている。

中国の『詩経』や『唐詩選』の中にも、万葉集の防人歌と似ている歌がある。小雅の「采薇」は詩経の中でも最も美しい詩とされているが、「出車」、「杕杜」と並んで従来の解釈では、これは玁狁という遊牧民の侵入によって、西周が衰亡したことを嘆いた歌とされてきた。まさしく防人の歌である。

中国・唐代の玄宗皇帝の治世(8世紀)は盛唐と呼ばれて国力も充実し、その支配は東北辺境の幽州(まだ中華の中心ではなかった現在の北京一帯)から西北のタクラマカン砂漠周辺にまで及んでいた。

「辺塞詩」とはこれら都から遠く離れた「辺塞」での異民族との戦いを舞台にした「防人歌」のことで、家族や友人との別れ、過酷な自然、望郷、出征の悲しみなどが歌われている。

一方、日本の万葉集の中にも、巻二十を中心に東国(今の静岡県以東)から九州へ行った「防人」の歌が収められている。「衛士」となって京へ上った人や軍団に入った人の歌は一首も残っていないのに、この「防人」の詠んだ歌が残っているということは、それに拠って、辺地防衛で故郷を遠く離れるという「防人」の心理と「歌」ととの関係を見出すことができる。

唐代以前の中国でも戦争があり、辺地防衛のために故郷・家族と離れて見知らぬところに行き、無事に帰ってこられるかどうか分からない悲しみにくられる兵士がいたはずである。国が違っても、同じ人間であり、その気持ちを日本の「防人歌」のような歌に託したかった心情は同じなのではないだろうか。このような観点から、今後、日本の「防人歌」と紀元前に中国を治めた古代王朝「周」の時代の「詩経」及び漢詩や文選との比較研究を行うためには「防人」という語の由来について考察する必要がある、本稿は「防人」の語について、中国と日本を比較することによって、防人歌の比較につなげていくことを目的とする。

## II. 先行研究と考察視点

水島義治の『万葉集防人歌の研究』では、日本の防人制度について論じているが、中国の防人につい

ては触れていない。

白川静は『中国古代歌謡 詩経』で、『詩経』の詩について全面的に解釈を施した。

『万葉集』や『詩経』について、それぞれ研究が行われてきたが、中国と日本の防人歌に関する比較にかかる研究は少ない。防人歌の比較研究を行うため、まず「防人」という語の成立年代、中国の防人と日本の防人の比較、そして『万葉集』の時代背景と防人歌の時代区分について研究を行う必要があり、本稿はそれを目的とする。

## III. 「防人」という語の成立年代について

「防人」は唐の律令に見える語である<sup>3</sup>。日本でもこれを採り入れて、この文字を用いたと思われる。万葉集に「佐吉母利」(四三三六)・「佐伎毛利」(四四二五)・「佐伎母里」(四三八二)・「佐伎母理」(三五六九)・「佐岐毛利」(四三八一)・と記されている語はこの防人のことと考えられるので、防人に相当する国語は「さきもり」であったことが知られる。また「佐伎牟理」(四三六四)とあるのは、その東国方言である。

先ず、「防人」という語がいつの年代から存在するのか、その年代考察から入りたい。中国では開元二五(738)年に成立したとみられる「唐六典」に書かれた唐令の一つ「辺要置防人為鎮守」に「防人」が記載され、この「辺要置防人為鎮守」は「隋開皇帝令三〇卷(582)年」「開皇令」(581)年によるところが多いことから、「防人」という語は中国では五八二年以前から存在していたと見られる。

一方、日本での「防人」という語は、日本書紀巻二五の孝徳の「大化二(646)年の正月」の「改新の詔」の中に書かれた次の語句が初見である。

「第二条 初修京師置畿内国司郡司関塞斥候防人駅馬伝馬及造鈴契定山河」

(国司＝地方区分として作られた国・郡・里のうち国毎に置かれた管理官、郡司＝地方区分として設置された国・郡・里のうち郡毎に置かれた管理官、関塞＝関所のこと、防人＝九州に置かれた防衛部隊、駅馬＝五畿七道ごとに置かれた施設である駅家の間を移動するために設置された馬、伝馬＝物資輸送を行うための馬)

こうしてみると、「防人」という語は中国では六世紀後半、日本でも多少遅れて七世紀中葉には存在したと見ることができる。しかし、「防人」という語はなくても、それに代るものが遙か以前にあったことは、三世紀末の「魏志倭人伝」（中国の歴史書『三国志』の中の「魏書」第30巻烏丸鮮卑東夷伝倭人条の略称）に見られる「碑奴母離」（概ねどの学説を見てもその意味合いとして、辺境を守る軍勢力を司るものとされている。）などによって分かる。こうした考察については、藤井甚太郎が1892年の『歴史地理』第一四巻四号において説くなど、史学方面からのものが多くある。

次に、「防人」という語が文芸と結びついたのはいつ頃からであるかという点について掘り下げる。その厳密な時期としては万葉集の巻二〇の四三二一番以後のもの、即ち「天平勝宝七歳」という755年があげられるが、万葉集の巻一四や巻二〇の「昔年防人歌」の存在などにより、それはおそらく七世紀に遡り得るところのものであろう。

一例として、次の巻一四の三五六九番の歌を示す。

原文＝佐伎母理尔 多知之安佐氣乃 可奈刀弓尔 手婆奈礼乎思美 奈吉思兒良婆母

訓読＝防人に立ちし朝開(あさけ)の金戸(かなと)出(で)に手(た)放(はな)れ惜しみ泣きし兒らばも

和訳＝防人として旅立つ朝明け方の家の立派な門から出立するに手を離すことを惜しんで泣いた愛しいあの娘よ

現代語訳＝防人に 出かけた夜明けの 門出の折に 別れの惜しさに 泣いていた妻よ

この歌の結句「兒良婆母」が「兒＋a＋はも」の形を取ることに着目すると、この「a」には「な、ろ、ら」などが入るが、この形のものは万葉集には全部で次に挙げる八首が見られる。

本文中の万葉集の歌（原文、訓読、和訳、現代語訳）は全て『萬葉集』日本古典文学全集（小学館昭和46年1月25日発行）から引用した。

卷三の二八四番歌

春日蔵首老（かすがのくらびとおゆ）の作歌。「春

日蔵首老歌一首」。

原文＝焼津辺 吾去鹿齒 駿河奈流 阿倍乃市道尔 相之兒等羽裳

訓読＝焼津辺(やきつへ)に わが行きしかば 駿河なる 阿倍の市道(いちぢ)に 逢ひし兒らはも

現代語訳＝焼津のあたりに 私が行った時に 駿河の国にある 阿倍の市で 逢ったあの女(こ)はどうしているかなあ

焼津の由来＝この年に日本武尊は初めて駿河(するが)に到着された。その土地の賊が偽って従い、尊(みこと)を騙(だま)して、「この野に大鹿がたいへん多くおります。その吐く息は朝霧のようで、足は茂った林のようでございます。お出かけになって狩りをなさいませ」と言った。日本武尊はその言葉を信用され、野の中に入って狩りをされた。賊は、かねてから王(みこ・日本武尊)を殺そうとする心があり、火を放って、その野を焼いた。王は騙されたと気付かれると、即座に火打(ひうち)を打って火を起し、迎え火をつけて難を免れることができた[一説に、王の腰に帯びた剣の叢雲(もらくも)が、ひとりでに抜けて、王の側(そば)近くの草を薙(な)ぎ払った。これによって難を逃れることができた。それでその剣を名付けて草薙(くさなぎ)というのである]。

卷一四の三五一三番の歌

原文＝由布佐礼婆 美夜麻乎左良奴 尔努具母能 安是 可多要牟等 伊比之兒呂婆母（作者不明）

訓読＝夕されば、み山を去らぬ、布雲(にのぐも)の、あぜか絶えむと、言ひし子ろはも

現代語訳＝夕方になると山から離れずにたなびいている布雲(にのぐも)のように、どうして絶えることがありましようかと言ったあの娘は

（布雲は布のように広がって続いている雲のことで、二人の間に切れぬ・絶えることが無いことのたとえに詠み込まれている）

卷一四の三五三二番の歌

原文＝波流能野尔 久佐波牟古麻能 久知夜麻受 安乎思努布良武 伊敝乃兒呂波母

訓読＝春の野に、草食(は)む駒(こま)の、口やま  
ず、あを偲(し)のふらむ、家の兒(こ)ろはも  
現代語訳＝春の野で 草を食う 子馬のように口が  
休めずに、私のことを常に偲んでいることであろう  
家の妻よ

卷一四の三五三四番の歌

原文＝安可胡麻我 可度弓乎思都々 伊弓可天尔 世  
之乎見多弓思 伊敝能兒良波母  
訓読＝赤駒が 門出をしつつ 出でかてに せしを  
見立てし 家の子らはも  
現代語訳＝赤駒が 乗って門出をしようとするが  
門のところで 出ようとしても 道を狭くしてしま  
う 旅立ちを見送る家の妻よ

卷一六の三八七四番の歌

原文＝所射鹿乎 認河邊之 和草 身若可倍尔 佐宿之  
兒等波母  
訓読＝射(い)ゆ鹿(し)を認(つな)ぐ川辺の和草  
(わかくさ)の身の若(わか)かへにさ寝(ね)し子らは  
も  
現代語訳＝弓で射られた鹿を探して見つけた 川辺  
の柔らかい草がまだ若いように、まだ初々しいけど  
私と共寝したあの児は  
共寝したあの児は。

卷一七の三八九七番の歌

原文＝大海乃 於久日母之良受 由久和礼乎 何時伎  
麻佐武等 問之兒<良>波母  
訓読＝大海の奥かも知らず行く吾れを いつ来まさ  
むと問ひし子らはも  
現代語訳＝大海越えて行く末何処かも分からないで  
いるのに 何時いつ帰るのかとあの児が聞いた  
(大きな海の) 果てしなく遠くに行く私に いつお  
帰りでしょうかと尋ねた妻よ)

卷二〇の四三五八番の歌

原文＝於保伎美乃 美許等加志古美 伊弓久礼婆

和努等里都伎弓 伊比之古奈波毛  
訓読＝大君の 命畏(みことかしこ)み 出(い)  
で来れば 我(わ)の取り付きて 言ひし子なはも  
現代語訳＝大王の御命令を畏れ入って、故郷を出立  
して来ると、私に取り付いて気持ちを云った愛しい  
あの娘

卷二〇の四四三一番の歌

原文＝佐左賀波乃 佐也久志毛用尔 奈々弁加流  
去呂毛尔麻世流 古侶賀波太波毛  
訓読＝笹が葉の さやぐ霜夜に 七重着る 衣に  
増せる 児ろが肌はも  
現代語訳＝小笹の葉の鳴る霜の夜 七重にも衣を  
重ね着する それにもまさる愛する人の温もりが  
思い出されることだ

結句が卷一四の三五六九番の歌の「兒良婆母」に  
対応して「兒等羽裳」「兒呂波母」「兒呂波母」  
「兒良波母」「兒等波母」「兒<良>波母」「古奈波  
毛」「古奈波毛」となった上記の八首は、すべて東  
国に關係の有する者の歌である。そうしてみると、  
最初に一例として示した卷一四の三五六九の歌は、  
東国という歌謡基盤に立つ歌謡集団の一員たる防人  
によって詠まれたのであるが故に、後述した八首と  
同様に形の古いものであることを知ることができ  
る。さらに、卷一四に収められている事情からも、  
そのことがうかがえ、防人の文芸は七世紀後半あた  
りから八世紀の中葉にかけてなされたと見ることが  
できるのではないだろうか。

これに対して中国の防人は、少なくとも文献とし  
ては、その後も、例えば朝元七(719)年詔に

「衛士防人以上 征行若右嶺 並給身糧」  
とあるなど継続されているが、これについては先に  
記した如き状態である。

## IV. 中国の「防人」及び日本の「防人」につ いて

### 1. 中国の「防人」について

「軍防令」とは軍団兵制、衛士(えじ)・防人(さ  
きもり)などの編成、指揮、軍規などを規定した古



代律令(りつりょう)の編目の一つである。中国では隋(ずい)の「開皇令」(581)年の「軍防令」、日本では「大宝(たいほう)令」(701)年の「軍防令」が最初のもつと見られているが、「大宝令」はもちろん、その「軍防令」も現存していない。養老(ようろう)令(718)年の「軍防令」全七六条が残るが、現存の養老軍防令と大宝軍防令がどのように違っていたのかは不明である。

「軍防令」からみると、中国の歴史は周知のように侵略・統一の循環ともいえるものであって、他民族の侵略による前民族の衰亡と、それに伴う文化遺産の伝承と変革の繰り返しである。従って、勢い込地防衛や要塞の整備が重要な課題となったが、その任務に従事した徴集百姓(この徴集百姓を武人の一員である兵士とみるならば)、すなわち兵士自らについて歌が詠まれたものは意外に少ないのである。彼らについての規定は、次のような「軍防令」にみえる。「軍防令」は、隋(ずい)の「開皇令」(581)年の「軍防令」の四〇条より成り、日本国の「養老軍防令」の骨子をなしたものである。殊に、その三二条以降が防人の条である。

その一例を示す。開元二五(738)年

開元七(七二〇年令)の

第三四条 衛士防人以上番還 並給身糧

養老軍防令の第六〇条

「軍防令 旧防人条 凡旧防人替訖 即給程糧發遣新人雖有欠少 不充元数 不得輒以旧人留帖」

(勤務を終えた防人を替え終わったならば、すぐに路程の食料を給付して故郷へ發遣すること。新人が欠けたり少なかったりすることがあって、元の数のぶんだけ充当できないとしても、安易に勤務を終えた人をもって留め補ってはならない)のもととなっているわけである。

いずれにせよ、こうしたものにおける記録は表面的かつ形式的なものであって、その実情、即ち、具体的例としてのものを知るのは、これだけでは無理である。といって、これを散文や韻文に求めても実態は残されていない。それでは彼らは喜々として「防人」に赴き、満足し得たのであろうか。政治家や職業軍人ならばともかく、百姓が戦役を忌避しようとするのは常とするところである。例えば、紀元前に中国を治めた古代王朝「周」の時代の「詩経」

に収録された『同賢記』などにも、狩守されようとする一般人の戦役に赴かんとするものの多くなかったことが出ている。

以上により、中国の「防人」については、「軍防令」のみが唯一の資料であることが見てとれた。

## 2. 日本の「防人」について

朝鮮半島に鼎立していた三つの国の一つである百済が、大陸の大国・唐の加勢を得た新羅によって滅ぼされたのは六六〇年、日本では斉明女帝の法政六年七月のことだった。

しかし、ここで百済の息の根が完全にとまったわけではなかった。国王や高官たちが捕えられて唐に送られたものの、遺臣たちが次々に挙兵して国政を挽回しようとした。中でも有力なのが鬼室福信という将軍だった。

日本の朝廷は九月のはじめ、来朝した百済の官人と僧によって、この百済滅亡を知り愕然とした。百済は半島三国の中では日本と一番つながりが深く、親善関係を持っていた国である。その国が滅んだのだ。大きなショックというよりほかになかった。

そのショックが収まらない十月、鬼室福信その人からの使者がやって来て、日本の来援を乞うた。三十年近く前の舒明三(631)年から日本に人質として預けていた百済の王子・豊璋を新しく国王としたので返してほしいと願うとともに、一緒に援軍を送ってほしいというものだった。

朝鮮半島への対応をめぐる日本の朝廷は揉めに揉めた。結局、当時の政治を取り仕切っていた皇太子・中大兄皇太子の決断によって、百済を救援することが決まった。

六八歳の老女帝・斉明天皇の乗った軍船を中心に、皇族、高官の乗る船団が難波の津(大阪港)を出たのは、斉明七(661)年正月六日のことだった。船団は三月二五日、那の大津(博多港)に入った。

老女帝は七月、暑さによる疲労のため亡くなったが、皇太子には母の死を悼むゆとりもなかった。それどころか即位もせず、668年に天智天皇に即位するまでの七年間、皇太子のままで国政を司る。この形を「称制」といった。

遠征の先発部隊の5千余人が王子・豊璋を守って出発したのは、翌662年正月のことだった。さらに、一年後の663年三月には、救援の第二軍二万七千人が朝鮮半島に向かった。日本にとってはまさに国運をかけた軍事行動だった。そして、日本と百済の連合軍は八月二七、八両日にわたる白村江（錦江の古名）の決戦で、唐と新羅の連合軍に惨敗し、百済はついに滅んだのだった。

事態は敗戦と百済の滅亡だけで済んだわけではなかった。勢いに乗った唐と新羅が、いつ、攻め寄せて来るかわからない、まさに緊急の事態だった。これに備えて朝廷がまずとった防衛手段は、急を伝えるための狼煙「烽火」や壱岐・対馬・筑紫に防人を置くという制度であり、筑紫にあった西国を統治する遠の朝廷「大宰府」を防衛するための「水城」の築造であった。

防人は、中国・唐の制度にならったもので、正式には「ぼうにん」と読む。「さきもり」は日本の読みで、「前守」「崎守」「岬守」などの字があてられた。辺境、殊に九州北部を中心とした西海の辺境を守る軍隊という意味である。

先に「日本での『防人』という語は、日本書紀卷二五の孝徳の『大化二（646）年の正月』の『改新の詔』の中に書かれた『第二条 初修京師置畿内国司郡司関塞斥候防人駅馬伝馬及造鈴契定山河』が初見である」と述べた。だが、これは文書だけのきまりで、実際には現実にはいつ外敵が攻めて来るかわからない状態に置かれた、この一八年後の天智三（664）年に編成されて守備についたものであろうといわれる。

今にも外敵が攻めて来るだろうという日本側の予測は、いささか神経過敏に過ぎたようだった。百済が滅んでも、半島には百済以上に強力な高句麗が残っており、唐の次の攻撃目標となっていた。新羅もこの唐の動きに協力しなければならなかったのだろう。

唐からは、新羅に進駐している長唐将の使者が天智三年五月に、本国からの使者が翌四年九月に来朝した。朝貢を促しに来たのか、国情視察のためか、不気味だったが、使者だから軍事的な意味は持っていなかった。

その後、天智十（671）年十一月、唐の使者ら二

千人が四十七隻の船で対馬近くの小さな島まで来た時、「今、われらがこれだけの大人数、大船団で行けば、筑紫の防人らがおどろいて戦ってくるだろう」と彼等が語り合ったという。（日本書紀）

日本側の過剰防備を嘲笑しているような言葉だが、防人の立場から見れば、常にこれほど緊迫した状況に置かれていたわけである。

ところで、その後整った古代国家の基本法である令の中の「軍防令」の規定によると、正丁（二十一歳から六十歳までの男子）は三人に一人の割で兵役につかなければならなかった。この兵士は各国に置かれた軍団に入る。一軍団の人員は普通一千人。軍団に入った兵士は、大体一か月ほどの訓練を受ける。租、庸、調、雑、徭という課税のほかに、この兵役は農民にとって苦しいものだったが、それでも、これは国元でのことで、兵士にはもっと辛い役割があった。それは遠い都に遣られる衛士、さらに遠い九州につかわされる防人である。衛士は、天皇の護衛隊である。五衛府に属して宮門の整備や雑役に当り、任期は一年。防人の任期は三年であった。

兵士の誰もが衛士や防人になったわけではない。中央政府から提供を命じられた国司が、正丁の中から該当者を選んだ。

任命の対象から外されたのは、父子、兄弟の間から既に兵士が出ている者、父母が高齢だったり病氣だったりした者のほか、その家に当該者以外の成年男子がいない場合などであった。

防人の任期は三年だが、それは任地に着いてからの計算で、任地に着くまでの何か月かは含まれていなかった。

防人軍団は、一国平均二、三百人ほど。その統率者は国造丁、その下に助丁がいた。国造とは国と郡などが置かれることになった大化改新より以前に、大和朝廷によって設置された地方官のことで、地方豪族が任じられた。大化改新によって廃止されたものの、律令制のもとにあっても地方豪族が優先的に郡司（郡長）に任じられ、その社会的地位は重要視されていた。

助丁は未成年の兵士のことだという説もあるが、やはり統率者である国造丁を助ける役も考えたほうが妥当と思われる。庶務、会計を受け持ったのは主帳丁（防人歌の作者としては「主帳」としても出て

くる) だった。

「軍防令」には「凡そ兵士は、十人を一火とす」とあるが、防人軍団でもそれは同じで、その長を「火長」といった。

一般の兵士は「丁」、または単に「防人」と呼ばれたが、そのうち上階の者が「上丁」であった。

防人軍団の一員となった兵士たちは、国司、もしくは国司が任命した「部領史」という輸送指揮官に引率されて難波の津へ行き、難波からは船で現地に向かった。

難波までの食糧は、それぞれ私物で賄うこととなっていた。上級階級は別として、防人となった大多数の農民は、故郷にいても困窮した生活を送っており、用意した旅のための携行食糧はどんなにか貧しく不備なものだったことだろうか。この一点を考えただけでも、彼らの「旅」の苦しさが察せられる。

食糧といえば、防人たちは現地(守備地)では水陸の便の良い空闲地を与えられ、この土地を耕して自らの食(主として野菜)を得たらしい。このためだろうか。出発の時、弓矢や大刀のような武具のほかに、鎌、鋤、斧などの農具が携行品として支給されている。

「軍防令」の防人に関する規定にはこんな一条もある。

「凡そ防人、防にみかはむ、若し家人、奴婢、及び牛馬将て行かむと欲ふこと有らば、聴せ(ある行為をさしつかえないと認める＝大辞林)」

家人、奴婢、牛馬を連れて行きたい防人がいたら、これを許可せよ、というのである。

奴婢は人として扱われず、物として売買されていた。家人はそれより一級上で、人として扱われていたが、所詮、従者に過ぎない。ここで引っかかるのは「碑」である。防人に関してではないが、「軍防令」には「凡そ征行せん時は、皆婦女を将て、水から随ふことを得じ」という決まりがあるからである。防人も「征行」する兵士だろう。「碑」は女である。しかし、人間ではなく物だからよいというのだろうか。

実際に家人や奴婢を連れて行く防人がいたのだろうか。『万葉集』の「防人の歌」を見る限り、そのような例は見当たらないが、次のような防人の妻の歌がある。

## 卷二〇の四四一七番の歌

豊島郡の上丁(かみつよろぼ) 棕椅部(くらはしべ) 荒虫が妻 宇遅部(うじべ) 黒女(くろめ) の歌

原文＝阿加胡麻乎 夜麻努尔波賀志 刀里加尔弓多麻<能>余許夜麻 加志由加也良牟

訓読＝赤駒を山野(やまぬ)に放(はが)し捕(と)りかにて 多摩の横山徒歩(かし) ゆか遣(や)らむ

現代語訳＝防人に出かける夫に、せめて馬を持たせたい。しかし、大事な赤駒は放し飼いでだし、あまりにも急な召集だから捕らえている間もない。もう、二度と会えないかも知れないのに、あの多摩の横山を越えて難波までの遠い苦労の路を歩いて行かせてしまうのだろうか・・・

この作者の夫は、明らかに馬に乗って防人に出で立つはずであった。しかし、あいにくその馬を山野に放してしまい、捕まえられないので、徒歩で行くことになるのである。とはいえ、牛馬についてもこの一首があるだけだから、こういった例はごく限られたものだったのではないだろうか。

「凡そ防人、防に在らば十日に一日の休暇放せ、病せらば皆医薬給え、火内の一人を遣りて、専ら静養をせしめよ」

「軍防令」には、このような防人にささやかな気遣いの規定も見えて、ほっとさせられる。

## 3. 中国の「防人」と日本の「防人」の比較

1. 中国と日本の「防人」を比較すると、次の3つの相違点を挙げることができる。

### ①「防人」という語の成立時期

「防人」という語は、中国では隋(ずい)の「開皇令」(581)年の「軍防令」にみえる。日本では「大宝(たいほう)令」(701)年の「軍防令」が最初のもものと見られている。日本の「防人」という語の存在は中国より100年以上遅れている。

### ②成立した時代背景

中国の「防人」は歴史上において珍しいものではなく、国内においての侵略・統一の循環の産物ともいえる。日本の「防人」は、唐と新羅が攻めて来る

ことを恐れて、やむを得ず政府が取った手段である。

### ③防人の役割

中国の「防人」は国内の侵略・統一に留まるが、日本の「防人」は唐や新羅、所謂外国からの侵略に対する防衛のために置かれたものである。

### 2. 中国と日本の「防人」の共通点

中国の「防人」も日本の「防人」もできれば故郷に残りたいという気持ちを持つが、国に命令されてやむを得ず「防人」として戦場に赴くものである。

## V. 『日本文学史』による万葉集の時代区分と防人歌の記載

第一期 舒明天皇の時代から壬申の乱までの中央集権体制が確立される間の激動の時期。

素朴さ、素直さ、清新さ、力強さ。

相聞歌が多い。五七音による定型が確立している。

集团的歌謡から個性的な創作歌への過渡期。

舒明天皇、天智天皇、天武天皇、額田王など皇室の歌人が活躍した。

第二期 壬申の乱後、平城京遷都（710）年に至るまでの、約四〇年間。

力強さ、重厚さ。

枕詞、序詞、対句などの技巧が発達する。

専門的の宮廷歌人が出現し、万葉調の完成期である。

第三期 平城京遷都（710）から天平五年（732）までの約二十年間の間で、奈良前期時代にあたる。仏教・儒教・老荘思想など、大陸の思想や文化が輸入され、和歌の世界にも知的な傾向が増した。

清澄な情景、人生の哀歓を詠む。

抒情的なものから客観性を持った歌へと発展を遂げた。

歌人：山部赤人、山上憶良

第四期 天平六年（734）から、集中最後の歌の作られた天平宝字三年（759）までの約二十年間で、奈良時代の中期にあたる。爛熟なした古代文化のかげで政治的な行きづまりに対する動揺や不安が広が

ってきた時代である。

歌は繊細で感傷的な傾向が強まり、実感を率直的に表現する力強さを失った。長歌が衰え、短歌が隆盛した。代表的な歌人は大伴家持である。

この時期においては、上代、東国出身の防人やその家族が詠んだ歌。父母・妻子・恋人との別離の悲しみや望郷・旅情などが素朴に歌われていて、読む人の心を打つ歌が多い。《万葉集》中に収められた防人および防人の家族たちの歌〈東歌（あずまうた）〉とともに、古代東国の民衆の歌として貴重な作品群である。総数は98首、うち97首が短歌で、残る1首は長歌である。内訳は、巻十四（東歌）中の〈防人歌〉の標目下に5首、巻二十中〈天平勝宝七歳乙未二月、相替りて筑紫に遣される諸国の防人等の歌〉の題のもとにそれぞれの作者の名前が付記された84首（うち1首が長歌）、そして〈昔年の防人の歌〉8首、〈昔年相替りし防人の歌〉1首である。

## VI. 『万葉集』及び「防人」の時代背景について

『万葉集』が編纂された時代はどのような時代だったのだろうか。対唐外交において、日本も詩歌などの文学を持たなければ文治国家とはいえないという意識が、時代背景にあったのではないと思われる。日本はまだ唐には敵わないとして、何とかそれを乗り越えようと文学のジャンルに目を開き、『万葉集』を編纂したのではないか。その意味では、『万葉集』編纂の背景には国威発揚があったといえる。

さらに、もう一つ、中国は対外的な対応も交えた歴史書を編纂する国だということを知ったからこそ、『日本書紀』を編纂することになったのではないと思われる。このことは、日本列島の中に目を向けるだけでは国家経営をやっていけない時代が来ていることを認識させられていたということである。江戸時代、鎖国をして国内は安定していたかに見えたが、幕末にイギリス、フランス、そしてアメリカの黒船がやって来ると、もう鎖国を正面切って唱えてもどうにもならなくなったのと同じような状況が、七、八世紀にも歴然として目の前に展開されていたということである。



白村江の戦いの敗戦によって日本は、唐や新羅に攻め込まれるからといって、唐や朝鮮半島と隔絶した外交抜きの「鎖国状態」ではやっていけなくなったのである。唐や朝鮮半島から人たちがやってきて、日本からも使節が行く。日本も唐、新羅、高句麗と対抗して国家経営をやっていないと遅れをとってしまうことを痛切に感じたわけである。

当時の朝廷ではこうした考えを強く持った「国際派」の官人と、あくまでわが国だけでやっていくべきだとする「国粹主義派」の官人とのせめぎ合いが始まる。そして、遣隋使、遣唐使などを通して対岸諸国を熟知した「国際派」が勝利の側に立つことができるかという、そうとは言えなかった。唐で学んできたものを日本に採り入れようとしても、それを許さない「国粹主義派」とのせめぎ合いの中で、『万葉集』や『日本書紀』は生まれるわけである。

その意味では、「万葉の時代」はまさに日本列島の中だけではやっていけない時代、まさに日本が否応なしに東アジア世界の一員に組み込まれていく国際的な大転換を迎えた大激動期だった。

今なお、こうした観点から改めて「万葉集」を読む必要がある。「万葉の大激動期」に保守的に生きるか、否応なしに国際派になるか、もし現代の人が七、八世紀に生きていたなら、どのような道を選ぶか。このように考え、自分の身をそこに置いて「万葉集」を読み直してみると、新しい読み方ができるのではないと思われる。

このように七世紀は、唐を中心に東アジアの世界が動いていた時代で、日本は対唐、そして対新羅、対高句麗の外交政策をどのようにやっていくべきかが明確に打ち出せなくなっていた時代とも言える。日本はそれまで唐と結ぶだけでよかったのだが、そこにはもはや対岸諸国との外交関係を軸におかなければ、新羅や高句麗にも置いてきぼりを食ってしまうと焦っていた日本の状況が読み取れる。

## VII. 考察及び分析

以上、防人という語の由来についてはこれまでに、「中国では『唐六典』にある『辺要置防人為鎮守』によるといわれ、『唐六典』の成立は普通、その所伝から開元二五年すなわち738年と見られてい

るが、この唐令は『隋開皇帝令三〇卷(582)年』によるところが多く、中国で『防人』という語は五八二年以前から存在していたと見られる」と述べた。さらに、日本での「防人」という語については先に、「日本書紀卷二五の孝徳の『大化二(646)年の正月』の『改新の詔』の中に書かれた『第二条 初修京師置畿内国司郡司閑塞斥候防人駅馬伝馬及造鈴契定山河』の語句が初見である」とも述べたが、上の初見もこれに従うとみるべくは、この影響の下にてなったのが日本の初見たる次の語句、すなわち大化二年(664)の正月の「初修京師 置畿内国司一防人一伝馬」である。

本文の万葉の時代背景についての項でも述べたように、日本と中国は、少なくとも600年に始まる遣隋使と630年に始まる遣唐使の時代から、歴史、文化面においても、政治面においても、緊密な関係にあり、中国の漢詩文は日本の文学の発展に大きな影響を与えた。

618年、隋に代わって中国を統一した唐は大帝国を築き、東アジアの広大な領域を支配して周辺諸地域に大きな影響を与えた。西アジアや中央アジアなどとの交流も活発であり、首都長安は国際都市として繁栄した。玄宗の治世前半は「開元の治」と称された。周辺諸国も唐と通交して、漢字・儒教・漢訳仏教などの諸文化を共有して東アジア文化圏が形成された。

唐代に、日本から中国の文化を習うことを目的に遣唐使が派遣された。その後も中国の学者が絶えず日本に中国文化の披露に來たことは、日本文化が大きく発展したきっかけとなった。初めての『詩経』の訳本は9世紀にみられる。その後、『詩経』の部分訳、全訳、評価の名著が続に出版され、また後世紀にわたって訳注、注釈が繰り返えし出版されたことによって、『詩経』が世間に広く知られるようになった。日本の詩歌の発展も『詩経』に大きく影響されている。『古今和歌集』の「序言」は、ほとんど「毛詩大序」『詩経』の内容と同じである。

また、中西進氏の「家持ノート」<sup>6)</sup>には、比較文学の立場から家持作品を以下のように論じている。

「以上第三期の家持の作品を形態的に分離することによって内容の変化を辿ってきた。その結果、越中時代に始まった試行は、ほぼ達せられたとかんが

えてよく、自己への沈潜という事が漢文学的要請へ消化した後の和歌の完成という目的を成し遂げているのであった。額田王に始まり人麿によって形式的に完成され、旅人、憶良、という大宰府人によって殆ど従前和歌形の崩壊をはらむ迄に拡大した和歌は、右の如き家持の和歌によって新しい姿として再生し得たというべきであろう。従って家持が旧族の故に和歌に執して万葉集を継承し、藤原氏が新貴族の故に漢詩に執して懷風藻を構成したといった類の論断や詩と歌との対抗といった如き図式化は、世目に余る程に横行しているが、これは余りもの俗論・概論であって、家持がいかに漢詩賦の世界に接近したか、そしてその中から何をしようとしたかを考えれば、家持がいかに新しい感性と漢籍的素質の持ち主だったかは明瞭なところである。」

この先行研究からも見られるように、大伴家持が漢文学の特に漢詩から多大な影響を受けていることは一目瞭然である。

これらを分析した結果として分かったことは、日本の和歌の成立において漢文学の果たした役割が大きいことである。また、防人という語は中国から約100年後の日本の文献に見られること、さらに、日本の防人も中国の防人も共通して、その心の中は故郷に残りたいという願望が渦巻いていたことである。

## Ⅷ. 終わりに

中国と日本は同じアジアにある一衣帯水の関係にある隣国であり、古代から文化的交流を行ってきた。中国の『詩経』と日本の『万葉集』の時代は、千年の差がある。しかし、日中両国の文学史では同じように重要な位置に置かれている。両国文学の源流といえと同時に、後世の文学にも大きな影響を与え続けている。

漢詩文は近江朝（667～672）の頃から関心が高まり、天智天皇以下の宮廷人たちの間で、その創作が盛んになった。中国の制度に模した日本の法令制度の在り方にしても、漢詩文の知識と創作は、律令官人にとって必須の教養であった。こうして漢詩文は伝統の和歌に対する新文学として、公的位置を獲得するようになっていくのである。

東歌と防人歌万葉集のもう一つの側面として見逃せないのは、古代の民衆たちの歌を数多く伝えていることである。とくに東歌と防人歌は、民衆の率直な感動や心を伝えて異彩を放っている。

以上述べてみたが、本稿は比較研究の第一歩に過ぎず、今後さらに『万葉集』の防人歌と中国の『詩経』及び『漢詩』に歌われている防人歌を、時代背景から比較研究していく必要がある。

## 参考文献

- ・水島義治. 萬葉集防人歌の研究. 東京: 笠間書房. 2009.
- ・阪下圭八. 万葉集 東歌・防人歌の心. 東京: 新日本出版社. 2001
- ・白川静. 詩経—中国古代歌謡. 東京: 中央公論社. 2002
- ・埤雅の研究・其八 稊草篇（4）茨城大学人文学部紀要. 人文学科論集. 44号2005. 9. P 29-44
- ・万葉の悲劇 その三 研究資料
- ・秋山虔・三好行雄. 日本文学史. 東京: 文英堂. 1999
- ・日本書紀
- ・金子武雄. 農民兵の悲哀と苦悶. 防人の歌. 東京: 公論社1976)
- ・日本海学推進機構

## 引用文献

### 1【林子平】 はやししへい

(1738～1793) 江戸中期の経世家。江戸の人。名は友直。号、六無斎。仙台藩に経済政策などを進言。長崎に遊学し、また江戸で大槻玄沢・桂川甫周などの蘭学者と交遊。海外事情に通じ、「海国兵談」を著し海防の必要を説き、また「三国通覧図説」では蝦夷地の開拓を説いたが、幕府の忌諱（きき）に触れ禁錮。寛政三奇人の一人。 <http://www.weblio.jp/content/三省堂> 大辞林 2015年10月20日にアクセス

### 2【高島秋帆】 たかしましゅうはん

1798 - 1866(寛政10 - 慶応2)

幕末の長崎会所調役頭取で砲術家。名は茂敦、通称は四郎太夫、秋帆は号。長崎防備のため、はじめ荻野流砲術を学び、のち出島のオランダ人から西洋砲術を学んで、これを高島流砲術と名づけた。西洋近代砲術を最初に紹介したものといえる。アヘン戦争が起こっ

た1840年(天保11), 幕府に上書して西洋砲術の採用を説いた。翌年幕命で出府し, 徳丸ヶ原で操練を行い, 名声を得た。幕府は高島流砲術を採用することとし, 彼の所持する大砲を購入し, あわせて代官江川太郎左衛門に砲術の伝授を命じた。

<https://kotobank.jp/word/世界大百科事典> 第2版の解説2015年10月20日にアクセス

### 3 衛士防人以上、征行若在鎮

#### 4 【唐六典】とウリクテン〔タウリクテン〕

中国、唐代の官制・法制について記した書。30巻。唐の玄宗の勅撰。李林甫(りりんぼ)らの注。738年成立。大唐六典。デジタル大辞泉の解説 2016年5月21日にアクセス

- 5 孟姜女, 来源于中国民间故事“孟姜女哭长城”。
- “孟姜”, 孟为庶长子或庶长女; 姜为姓, 是美女的象征性称呼, 在《诗经》中多次出现, 如《诗经·国风·郑风·有女同车章》有句
- 作品原文: 有女同车
- 有女同车, 颜如舜华。将翱将翔, 佩玉琼琚。彼美孟姜, 洵美且都。
- 訳: 『同賢記』の中の中国の『孟姜女哭长城』という民間伝説からきてある。新婚の夜に夫が出征に行かされて、探しに行ったらすでに死んである。詩経の中の《诗经·国风·郑风·有女同车章》このような表現がある。それ以来、彼美孟姜は美女の通称となった。

#### 6 中西進著. 万葉の比較文学的研究 中. 東京: 桜楓社、1963. P49～1492